

普通に暮らせることのありがたさ

習志野市立第六中学校 3年 大竹 柊里

私には大切にしている言葉がある。それは、「普通に暮らせることのありがたさ」だ。これは、小学四年生のときに父から言われた言葉であり、それ以来、苦しいとき、辛いとき、また、調子が良すぎて浮かれてしまいそうなきにも、この言葉を自分に言い聞かせている。

私は小学四年生のときに、ある血液の病気になった。その病気は非常に稀な病気で、治療してもらえる病院が全国でも限られていたため、私はその病気を治すために、自宅から遠く離れた大阪のこども病院に入院した。

この入院生活の中でとても印象に残っている思い出がある。それは病院の先生から初めて外出許可をもらい、両親と一緒に病院近くのスーパーに買い物に行ったときのことである。このとき私はスーパーで特別なことをした訳ではなかったが、そこで目にした商品、店内の音楽、食品の匂いなど、すべてが新鮮に感じて、まるで初めて遊園地に連れて行ってもらったときのような興奮を覚えたのと同時に、そのひとときは神様がくれたプレゼントだとさえ思ったのであった。

その後、私は入院中に行ったさい帯血移植が成功し、退院することができた。そして自宅に戻ったときには、入院前と同じ生活ができることに何十倍も何百倍もの幸せを感じることもできた。

そんなとき父から、「普通に暮らせることのありがたさを大切にしてほしい。」と言われた。それを聞いた私は、父の言葉の意味が、自らの入院生活を通じて感じた気持ちのことなのだとすぐに分かった。しかし、父が伝えたかったのはそれだけではなかった。父は続けて、「入院中にはたくさんの人に助けられた。そしてたくさんの制度に支えられた。社会には困っている人に手を差し伸べてくれる制度がある。そんな社会に支えられて、私たちの今の幸せがあるのだ。」と教えてくれた。母からは、私がさい帯血を提供してもらえたのは、さい帯血バンクという仕組みがあったからであり、輸血ができたのは、全国各地で行われている献血のおかげであると教えてもらった。さらに、私の治療にかかった医療費は、小児慢性特定疾病医療費助成制度という自治体が高額な医療費を補助してくれる制度により、金銭的に大変助けられたのだとも教えてくれた。そしてこれらの制度や様々な公共サービスは、人々の善意や税金によって支えられているのだと知った。

日々の何気なく過ごしていく中で、普通に暮らせることが当たり前だと思いがちだが、実は、普通に暮らせることはとてもありがたいことである。私は周りの全ての人が明るく前向きに、そして笑顔で暮らせる社会であってほしいと思う。そしていつか、そんなすばらしい社会に貢献できる大人になりたい。